牧が丘だより

校訓　自主の精神
令和４年度第６号
令和５年３月１５日発行
真岡市立中村中学校　学校だより

◇３月１０日（金）第７６回卒業式を実施することができ感謝申し上げます。
校長式辞を掲載させていただきます。

［式辞］

１１７名の卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。先ほど皆さんに手渡した卒業証書には、２つの意味が込められています。１つは、「３年間、たゆまぬ努力をして中学校の全ての教育課程、つまり、学業の全てが終了したこと」　２つめは、「９年間の義務教育が終了し、自らの判断と責任において、自分自身の人生を切り拓いていく出発点に立つことができた」　という意味です。卒業生のみなさん、もう一度、その両手にそっと力を込め、膝の上にある卒業証書から、２つの意味の深さ、そして、自分自身への「誇り」、そして、今、正面に座る保護者への「感謝」を感じ取ってください。

今、思い返すと皆さんとの出会いは、令和元年、当時皆さんは六年生、それぞれの小学校から、私の待つ自然教育センターに、元気よく入所したことを覚えています。３年生、４年生と同時に入所し、しっかり面倒を見る逞しさも感じましたが、少し、あどけなさが残る、はち切れんばかりの笑顔で、多くの活動を通し、友との友情を深め、絆を確固たるものにする様子が、今でも鮮明に蘇ります。そんな皆さんと、私は、ここ中村中学校の門を同時にくぐった３年前が、つい昨日のように思い出されます。ただ、感染症防止対策のため、臨時休校等の措置。理想とする中学校入学、思い描いた中学校生活のスタートとは異なったことでしょう。

６月、全生徒・教職員がもどった学校はまるで新たな息吹を得たかのように、鮮やかな色を放ち、輝きを取り戻したことを今、一緒に思い出しましょう。

３年ぶり、奈良・京都方面への修学旅行、テーマ「みんなで紡ぐ伝統の糸」を合い言葉に、５０年を超える伝統を絶やさぬためにも比叡山延暦寺を訪れ、クリーン修学旅行を、何としても実施する決意でした。京都に到着した瞬間、夏の太陽がみなさんを容赦なく照らし、手厚い歓迎をしてくれました。歴史と文化を十分堪能しながらも、仲間との「密な時間」を楽しむ姿に、中学生としての、本来の姿と逞しさを垣間見ることができました。

１０月、学校祭。どうしても保護者の方々に直接、観て、聞いていただくことが夢でした。合唱コンクールを。それぞれの学級が、思いを込め、選んだ合唱曲。その歌詞に、自分の中学校生活を、まるで重ねるかの如く丁寧に歌唱う姿。練習の過程では、私にも想像つかないような苦悩、葛藤があったことでしょう。しかし、乗り越えるための人間性、人格を養ってきたのが、この３年間です。その成長の証を保護者と我々教職員が、ともに確認できたことに感謝しています。

そして、部活動。自分自身が輝けるため、人知れず努力したことも数え切れないと確信しています。しかし、弛まぬ努力がやがて、大きな成長に結びつき、人を感動させることに必ず結びつきます。感性豊かで、多くのことを物語るような作品。奏でる音によって、心を揺さぶり、感動の涙まで誘う音楽。そして、チームのため仲間のため、自身の身を挺して最後まで戦う姿。部活動で過ごした、友との貴重な時間が最後に凝縮され、自然と涙する姿に心打たれました。

今後、皆さんが活躍を目指す社会は、過去の事例や経験にとらわれることなく、新たな発想・手段が必ず求められます。グローバル化、世界的な情報社会、多くの民族の垣根を越えた国際理解が求められる時代です。そして、豊かな生活を求めていくと同時に、地球上にある多くの課題を解決しなければなりません。このような時代だからこそ、皆さんに求められるのは、自主の力、創造の力、奉仕の力だと考えています。一人の自立した人間として、何事にも対峙していく力をもってほしと強く願っています。

保護者の皆様に、お礼を申しあげます。「お子様のご卒業、誠におめでとうございます。」そして、本校の教育活動に温かいご支援とご協力を賜りましたことに、心よりお礼を申し上げます。

私ども教職員は、大切なお子様を３年間お預かりし、一人ひとりの幸せを願いながら、渾身の力を込めて教育に携わってまいりました。３年間という限られた歳月の中で、このように立派に成長したことを、大変嬉しく思うとともに、今後、明確な信念のもと「新たな夢」をもとめ、人生を歩むと確信しております。

卒業生の皆さん、いよいよ旅立ちの時がきました。皆さんは、本校の歴史に新たな１ページをしっかりと刻んでくれました。青春の学び舎「牧が丘・中村中学校」は、永遠の故郷です。いつまでも温かく、見守っています。

結びに当たり、本校の全ての教職員を代表し、悠々たる皆さんの、前途を祝し、式辞といたします。

令和５年３月１０日　真岡市立中村中学校長　古澤　英明